第三章　宇治の姉妹の物語　晩秋の傷心の姫君たち

［第一段　九月、忌中の姫君たち］

明けぬ夜の心地ながら(宇治山荘は明けぬ夜のように晴れない気分のままに)、九月にもなりぬ(九月になりました)。野山のけしき、まして袖の時雨をもよほしがちに(野山の景色はいつにまして涙ながらの時雨がちに)、ともすればあらそひ落つる木の葉の音も、水の響きも、涙の滝も、一つもののやうに暮れ惑ひて(時に競うように落ちる木の葉の音も、集めて早い川の流れの響きも、滝のように落ちる涙に上げる泣き声も、一つになって暮れ沈んで)、「かうては、いかでか、限りあらむ御命も、しばしめぐらいたまはむ(このようにしていては、いかに余命長く定めあろうという姫君たちも暫しも生き永らえなされまい)」と、さぶらふ人びとは(と側仕えする女房たちは)、心細く、いみじく慰めきこえつつ(心細く頻りに慰め申し上げます)。

ここにも念仏の僧さぶらひて(此方の山荘にも山寺から念仏の僧が仕えていて)、*おはしましし方は(故宮がお住まいだった部屋には)、仏を形見に見たてまつりつつ(仏像を形見に見立て申し上げ)、時々参り仕うまつりし人びとの(宮の生前に時々山荘に参上して奉仕申していた近隣の荘園従事者で)、御忌に籠もりたる限りは(喪中謹慎する者が皆)、あはれに行ひて過ぐす(この部屋にお参り申してしめやかに念仏供養をして過ごします)。　*「おはしましし方」は注に＜生前に八宮がいらっしゃった部屋。＞とある。

兵部卿宮よりも(匂兵部卿宮からも)、たびたび弔らひきこえたまふ(度々弔問の御見舞品が遣し申されなさいます)。さやうの御返りなど(しかし、その御礼状などを)、聞こえむ心地もしたまはず(妹姫はお応え申す気にはお成りになりません)。おぼつかなければ(匂宮は便りの無いのが頼り無く)、「中納言にはかうもあらざなるを(中納言にはこういう無礼は無いだろうに)、我をばなほ思ひ放ちたまへるなめり(私のことはやはり気にしていらっしゃらないようだな)」と、恨めしく思す(と不満にお思いになります)。

*紅葉の盛りに(匂宮は紅葉の盛りとなるこの晩秋に)、文など作らせたまはむとて(漢詩文などを作り競わせなさろうと)、出で立ちたまひしを(宇治行きを準備なさっていたが)、かく(このような不幸時で)、このわたりの御逍遥(この山荘近くの園遊は)、便なきころなれば(不都合だったので)、思しとまりて口惜しくなむ(中止なさって残念でした)。　*「もみぢのさかりに」は注に＜前に「兵部卿宮もこの秋のほどに紅葉見におはしまさむと」（第二章三節）とあった。「文」は漢詩文をさす。「せ」使役の助動詞。文人官人たちを引き連れて行き、彼等に作らせるという趣向であろう。＞とある。「出で立つ」は＜旅立つ＞だが、その＜準備をする＞という語用もあるらしい。この宇治行きは中止されたようなので、この「出で立ち」は「出で立ち急ぎ」のことなのだろう。

［第二段　匂宮からの弔問の手紙］

御忌も果てぬ(おおんいみもはてぬ、三十日の忌中も終わりました)。　*注に＜『集成』は「八の宮が亡くなったのは八月二十日だから、忌の三十日を過ぎて九月二十日過ぎの頃」。『完訳』は「三十日の忌を過ぎた九月二十日過ぎか。四十九日の忌とすれば十月初冬で、時期が合わない」と注す。＞とある。是はまだ、晩秋

の話の内のようなので、従う。ところで、喪中は忌服(きぶく)の期間のことらしいが、忌は<いやなこととして避ける。>、服は<従事する。>と漢字の意味として大辞泉にあり、忌は対外的に社交断絶を示す葬儀期間で、服は社交再開後に於いて縁者が自身で故人を追悼して質素に暮らす謹慎期間、といった意味のようだ。仏教で七日ごとの法要が営まれるのは、死者の霊が冥土で七日毎に本性の善悪を審査される、という方便に基づくらしいが、その七日毎という説に多くの人が納得したことと、一週間が七日なのとには、必ずや同根の摂理が背景にあると思われるが、今はそこに立ち入らない。で、仏教上や神道上での忌中期間はさて置いて、忌とされる死の穢れについて想像すれば、まさに死体を葬って片付けるまでの間のように思われ、服喪という個人の追悼意のような想念とは違って、忌日は実際には物理的な作業日がそれぞれの場合毎に決まっていたものだろう。しかし、葬儀は如何にも社会的な儀式であって、服喪期間と共に、何らかの社会的合意によって、基準化される事が多くの人にとって都合が良いので、その一つの合理的な理論体系として仏教が利用されて来た、という事情は分かり易い。つまり、経典の精緻な真偽自体よりも、権威付けとは即ち、公共事業の執行責任者に仏教者を重用して、その先進技術によって増産が実現されれば、教義はおおよその分かり易ささえあれば、むしろ多くの人は共通基盤の整備そのものを望んでいたので、仏教への信頼が速やかに広く浸透したのだろう。時機を得る、というのは決定的に重要だ。

限りあれば(泣き続けるのもキリがあるので)、涙も隙もやと思しやりて(涙も途切れる頃かと思い遣りなさって)、いと多く書き続けたまへり(匂宮は姫君にとても長文を書いて送りなさいました)。

「*時雨がちなる夕つ方(時雨がちな夕方に思い詠みます)、　*「時雨がちなる」は渋谷校訂では地文のようで、歌からが文面括弧となっているが、私は此処からを匂宮の文面と読みたい。

牡鹿鳴く秋の山里いかならむ、小萩が露のかかる夕暮　(和歌 46-07)

萩の露 鹿鳴く宇治も 夕暮れか　(意訳 46-07)

*注に<匂宮から中君への贈歌。「小萩」は姫君を準え、「露」は涙を象徴。「かかる」は「露が懸かる」と「かかる夕暮」という掛詞表現。>とある。「牡鹿鳴く秋の山里」が<宇治>を示すのは、例の、百人一首で有名であるらしい、古今集 983 番の喜撰法師の風刺歌、「我が庵は(わがいほは)都の辰巳(みやこのたつみ)鹿ぞ住む(しかぞすむ)世を宇治山と(よをうぢやまと)人は言ふなり(ひとはいふなり)」に拠るのだろうか。「牡鹿鳴く(をじかなく)」は秋に牡鹿が雌鹿を求めて鳴くのだから、匂宮は姫に懸想を訴えている。また、「萩」と「鹿」を取り合わせた光景は秋の風情の代表的なものの一つらしく、匂宮巻二章四段に匂宮の女遊びっぷりを表わす語りに、「わが岡に(わがをかに)小牡鹿来鳴く(さをしかきなく)初萩の(はつはぎの)花妻問ひに(はなづまとひに)来鳴く小牡鹿(きなくさをしか)」(万葉集 8-1541 大伴旅人)が引かれていた。

ただ今の空のけしき(この時節の秋空の情緒にまで)、思し知らぬ顔ならむも(知らん顔なさるのは)、あまり心づきなくこそあるべけれ(あまりに無風流に過ぎましょう)。*枯れゆく野辺も、分きて眺めらるるころになむ(枯れ行く野辺も特に趣き深いものです)」などあり(などの文面でした)。　*「枯れゆく野辺も」は注に<『全書』は「鹿の棲む尾上の萩の下葉より枯れ行く野辺も哀れとぞ見る」(新千載集秋下、五二六、具平親王)を指摘。>とある。「新千載和歌集」自体は室町期の編集らしいので、平安期の作者がこの歌集を参照した筈はないが、具平親王(ともひらしんわう)は<[964〜1009] 平安中期の文人・歌人。村上天皇の第 7 皇子。中務(なかつかさ)卿。六条宮・千種(ちぐさ)殿・後(のちの)中書王とよばれる。文才豊かで、

和歌・漢詩文に長じ、音楽・陰陽(おんよう)・医術などにも通じた。＞と大辞泉にあり、散逸して今に伝わらない別の何かを参照したのは確からしい。それも、あまりにも匂宮の立場に重なる具平親王の詠み方からして、具平親王を匂宮に象った事のネタバラシにさえ見える。

「げに(兵部卿宮の御説通り)、いとあまり思ひ知らぬやうにて(あまりに知らぬ顔をして)、たびたびになりぬるを(お返事を差し上げないのも度重なっているので)、なほ、聞こえたまへ(やはり今回は御返事申し上げなさいませ)」

など(など姉姫は)、*中の宮を、例の、そそのかして(妹姫をいつものように促して)、書かせたてまつりたまふ(匂宮にお返事をお書きなさせ申しなさいます)。　*「中の宮」は注に＜中君のこと。『集成』は「この呼称はここが初出で、これ以後、この人は「中の宮」と呼ばれる」。『新大系』は「「中の宮」は、中君の、親王の娘であることを強調した呼称。八宮死去後のここが初出。これ以後、大君を「姫宮」と呼ぶのと応じあっている」と注す。当時、親王の娘「女王」を「宮」と呼称することもあった。＞とある。言い換え文では、どうしても不都合な場面でなければ、今までどおり「姉姫」「妹姫」と呼称したい。

「今日までながらへて(父宮の後を追う心算だったものを、今日まで生き永らえて)、硯など近くひき寄せて見るべきものとやは思ひし(硯など近くに引き寄せて風流めいた文を書くことになろうなどとは思っても見ませんでした)。心憂くも過ぎにける日数かな(月日の経つのが早すぎて)」と思すに(とお思いになって)、またかきくもり(また涙に暮れて)、もの見えぬ心地したまへば(何も考えられない気がして)、押しやりて(硯を押し遣っては)、

「なほ、えこそ書きはべるまじけれ(やはりとてもお返事は書けません)。やうやうかう起きゐられなどしはべるが(ようやくこのように起きていられるようになって来ましたが)、げに(それがまた)、限りありけるにこそとおぼゆるも(悲しみにも限りがあると思えるのが)、疎ましう心憂くて(心外で厭で)」

と(と妹姫が)、らうたげなるさまに泣きしをれておはするも(神妙に泣き萎れていらっしゃるのも)、いと心苦し(とても痛々しい)。

夕暮のほどより*来ける御使ひ(夕方から来て侍所で姫君のお返事をお待ち申していた匂宮の御文遣いが)、*宵すこし過ぎてぞ*来たる(約束の刻限の九時を回ったということで受取りに玄関先に来ていました)。　*「来けり」は＜来ていた＞。「おおんつかひ」は前回までは、忌中なので御返事は遠慮する、と追い返されていたものを、今回は「御忌も果てぬ」ので、御返事を待っていた、のだろう。　「よひ」は＜夜になってまだ間もない頃。夜がそれほどふけていない頃。初更。＞と大辞林にある。「初更(しょかう)」は＜五更の第一。およそ現在の午後 7 時または 8 時から 2 時間をいう。一更。戌(いぬ)の刻。甲夜(こうや)。＞と大辞泉にある。その少し過ぎは「二更(にかう、五更の第二。およそ現在の午後 9 時または午後 10 時から 2 時間をいう。亥(い)の刻。乙夜(いつや)。)」に入った頃だから、夜の 9 時過ぎと見て置く。　*「来たり」は＜来ている＞。「来たる」の連体形は係助詞「ぞ」を受けた文末文型。「ぞ」は理由立てを示していて、宵が刻限と約してあったのだろう、使者は約束の時間なので姫の返書を受け取りに玄関に来ていた、と読んで置く。と、何とか文意を得たいので彼是と想像して整理したが、こんな舌足らずの分かり難い文は普通は棄却する。

「*いかでか、帰り参らむ(こんな夜更けに、どうして帰参申せましょう)。今宵は旅寝して(今宵は旅寝して、明日帰参申せ)」と言はせたまへど(と姉姫は女房から御使者に言わせなさるが)、「立ち帰りこそ(今日中に引き返して)、*参りなめ(兵部卿宮に参上せねばなりません)」と急げば(と御使者は帰参を急ぐので)、いとほしうて(姉姫は困って)、我さかしう思ひしづめたまふにはあらねど(自分が冷静に落ち着いている訳ではなかったが)、見わづらひたまひて(この不都合な事態を何とか収めようとお思いになって)、　*「いかでか〜」は注に＜大君の詞。反語表現。＞とある。この文の主語が姉姫だというのは文意から推して知るもので、はっきりしない語りが続いているという印象が私には強い。　*「参りなむ」の「む」は意志の助動詞で、「な」は遂行の助動詞「ぬ」の未然形で、「なむ」は＜遂行する心算だ＞という言い方で、その已然形の言い切り、または命令形の「なめ」は＜やり遂げなければならない＞という切迫感を示す表現、かと思う。

「涙のみ霧りふたがれる山里は、籬に鹿ぞ諸声に鳴く」(和歌 46-08)

「霧の宇治 萩の籬に 鹿来鳴く」(意訳 46-08)

*注に＜大君の代作歌。「山里」をそのまま、「牡鹿」を「鹿」と替えて返す。「鹿」を自分たちに譬え、「鳴く」は「泣く」を響かす。＞とある。歌の心は那辺にあるや。匂宮の立場になってこの返歌を読めば、「鹿ぞ諸声に鳴く」は自分が詠み贈った「牡鹿鳴く」に呼応した詠み方で、少なくも嫌悪は示していないので、さぞ嬉しくも安堵したことだろう。それに、詠み方自体が、匂宮が「いかならむ」と問い掛けたことに対して素直に応えていて、非常に好感が持てる。気が利いているかといえば、その点は然程に新味は無いが、「小萩が露のかかる夕暮」と投げ掛けた優言葉に「涙のみ霧りふたがれる」と従順に応える姿勢には微塵も相手の言葉に逆らうような拒否意が無く、何処までも淑やかで大人しい印象だ。ただ、「ふたがれる」「まがき」という言い方に示された姫君の謹慎事情を、静かに見守って欲しい、と読むのか、上手く誘い出して欲しい、と読むのかは、匂宮が逆に試されているようで少し悩ましいかもしれない。勿論、匂宮は誘い掛けている以上、見守る心算はないし、姫君の方もそれは承知しているだろうが、その誘い方が優しくなのか、楽しくなのか、に迷うということだ。そして、正解は姫君にも分からない。後は互いに探りながら話を進めるということになるのだろうが、話を進める事自体の同意は取り付けた、と匂宮は思う。が、問題は、やはり是が妹姫自身の答えでは無い、という事に成って来そうだ。姉姫は代返にしては、代返だから気楽だったのかもしれないが、それは危険で、「もろごゑ」が＜他に言い寄る男＞を感じさせてしまうことにまでは気が回っていないようで、余りに安易に匂宮に話を合わせ過ぎている感はある。

*黒き紙に(灰色の紙に)、夜の墨つきもたどたどしければ(夜目の墨付きも見え難いので)、ひきつくろふところもなく(姉姫は書き栄えを気にせずに)、筆にまかせて(筆の運ぶままに書き上げて)、*おし包みて出だしたまひつ(急ぎ包んで差し出しなさったのです)。　*「黒き紙」は注に＜服喪中なので黒色を用いた。＞とある。薄い墨色＝灰色、だろうか。　*「おしつつむ」は大辞林に＜しっかり包む。念入りに包む。＞または＜物事を隠す。表面に出さないようにする。＞とあるが、此処での「おし」は「押し込む」の強引さを示しているような語感だ。

[第三段　匂宮の使者、帰邸]

御使ひは(御文遣いは)、*木幡の山のほども(木幡の山道も)、雨もよにいと恐ろしげなれど(雨の勢いも物凄かったが)、さやうのもの懼ぢすまじきをや選り出でたまひけむ(それに臆する事も

無い者を匂宮は選び出しなさっていたらしく)、むつかしげなる*笹の隈を(暗く気味悪い竹やぶ道を)、駒ひきとどむるほどもなくうち早めて(馬を休めること無く鞭打って)、片時に参り着きぬ(半刻で二条院に戻り着きました)。御前にても(形を整えて匂宮の前に参上申しても)、いたく濡れて参りたれば(御文遣いはひどく濡れていたので)、禄賜ふ(宮は着替えの衣服をお与えなさいます)。 *「木幡(こはた)」は＜京都府宇治市木幡(こわた)町を中心として山科あたりまでを含んだ地域の古称。［歌枕］＞と大辞泉にあり、例示参照歌には「山科の木幡の山を馬はあれど徒歩(かち)より我が来し汝(な)を思ひかねて」〈万・二四二五〉が引用されている。歌枕とあるからは、当文は必ずや古歌を下敷きにした言い回しなのだろうと思うので、この万葉集歌もその一つかと興味を持ったが、この参照歌は妙に難解だ。が、折角なので少し考える。で、万葉集の巻 11 の 2425 番をウエブ検索すると、この歌は柿本人麻呂が詠んだ寄物陳思に類する歌で、万葉かなでの助詞遣いの無い漢字文表記によるもの、と知れた。物に寄せて思ひを陳ぶる歌で「木幡」に因む恋歌詠みということは、「木幡」は何か特別な意味のある地名かも知れない。さて、この参照歌の原文とされるものは「山科強田山馬雖在歩吾来汝念不得」で、この内、「山科」と「強田山」は日本地名なので、それぞれ「やましな」と「こはたやま」らしく、「山科強田山」は＜やましなのこはたやまに＞という目的格の助詞適用による訓読みで良いのだろう。しかし、「馬雖在」「歩吾来」「汝念不得」は漢文意から見て節区分はこの三節で良さそうだが、この詩文は和歌なので各三節を「マー・スイ・ザイ」「ホ・ゴ・ライ」「ジョ・ネン・フ・トク」と音読みしても韻に感銘を受けることも無く、「馬雖在」の＜馬が居ても＞、「歩吾来」の＜歩き我越し＞、「汝念不得」の＜おまえの念が得られない→おまえの事が考えられない＞という各節句の意味が、どういう論理構成で、どういう歌意を示すのかは直ちには分かり難い。それでも、「雖」は訓読みで＜言えども＝しかしながら＞という論理副詞なので、「馬雖在歩吾来」が＜馬が使えたが歩いて来た＞という筋にはなりそうだ。となると、「汝念不得」は＜馬を使わなかったこと＞か＜歩いて来たこと＞か、その両方かの〔理由提示〕になりそうで、訓読みは＜おまえの事が考えられなかったから＞で「馬雖在」に掛かるか、または＜おまえの事を考えるために＞で「歩吾来」に掛かる、という論理構文になりそうだ。しかし、＜馬だとおまえの事が考えられない＞というのも、＜おまえの事を考えるために歩く＞というのも、何故馬ではダメで徒歩なら良いのかが分からない。くどくどと考えて来ても、結局、この歌は「木幡」の土地柄を前提にしていそうには見えるが、その「土地柄」自体は説明されていない。かくして、この御使が豪雨の木幡山を突き抜けることの意味は全く分からない。折角の寄り道が、見事に徒労に終わった。 *「笹の隈を駒ひきとどむる」は注に＜『源氏釈』は「笹の隈桧の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」（古今集、大歌所御歌、一〇八〇、神遊びの歌）を指摘。『弄花抄』は「山科の木幡の里に馬はあれど徒歩よりぞ来る君を思へば」（拾遺集雑恋、一二四三、読人しらず）を指摘。＞とある。古今集の歌はざっと＜桧隈川で馬に水を遣って少し休んでください、その姿だけでも見たいから＞という歌筋らしい。「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページに少し解説があったが、「ひのくまがは」の土地柄や歌意の背景などは分からなかった。ただ、この歌が万葉集・巻 12－3097 の焼き直しかのような指摘があったことは興味深い。「檜隈川」自体については大辞林に＜奈良県高取町の高取山に発し、高市郡明日香村檜前(ひのくま)を北流する川。((歌枕))＞とある。ともあれ、此処では「ささのくま」とあるので、「檜隈川」に因む歌意とは別に、林を馬で抜ける暗い山道の絵柄描写を古歌にある馴染みの言い回しで洒落た、という語用なのだろう。また、拾遺集の歌は前項ノートで見た万葉集 2425 の焼き直しに見えるが、やはり何も分からない。

さきざき御覧ぜしにはあらぬ手の(御文は以前に御覧になったものとは違う筆跡の)、今すこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまなどを(今少し大人っぽく教養ある手筋であるのを)、「いづれか、いづれならむ(どっちの手紙がどっちの姫なのだろう)」と(と匂宮は)、うちも置かず御覧じつつ(熱心に御覧になっては)、とみにも大殿籠もらねば(直ぐにはお寝すみなさらないので)、

「待つとて、起きおはしまし(お手紙を待つということで起きていらっしゃったんですよ)」
「また御覧ずるほどの久しきは、いかばかり御心にしむことならむ(また随分長いこと御覧になっていて、よほど興味をお持ちのようですね)」

と、御前なる人びと(と側仕えする女房たちは)、ささめき聞こえて、憎みきこゆ(ひそひそ申して妬みます)。ねぶたければなめり(眠たいからなのでしょう)。

まだ朝霧深き朝に(まだあさぎりふかきあしたに)、いそぎ起きてたてまつりたまふ(匂宮は早起きして宇治にお手紙を差し上げなさいます)。

「朝霧に友まどはせる鹿の音を、おほかたにやはあはれとも聞く　(和歌 46－09)

「朝霧に 哀れに響く 鹿の音　(意訳 46－09)

*注に＜匂宮から中君への返歌。「霧」「鹿」の語句を用いて返す。『異本紫明抄』は「声立てて鳴きぞしぬべき秋霧に友惑はせる鹿にはあらねど」（後撰集秋下、三七二、紀友則）、『大系』は「夕されば佐保の河原の河霧に友惑はせる千鳥鳴くなり」（拾遺集冬、二三八、紀友則）を指摘。＞とある。「まどはす」は＜迷わす←見失う＞で、「友惑はす」は＜友を見失う＞という言い方らしい。で、「とも」を＜同居者＞と取れば、「朝霧に友まどはせる(朝霧に友を見失う)」は、姫の返歌「涙のみ霧りふたがれる山里は籬に鹿ぞ諸声に鳴く」(和歌 46-08)に素直に応えて＜父を亡くして涙に暮れる姫への同情＞を示しているように見える。が、先に宮が詠み贈った「牡鹿鳴く」(和歌 46-07)の求愛意を踏まえれば、「とも」は＜親しく思う相手＞であり、この「友まどはせる鹿の音」は＜牝鹿を求めて鳴く牡鹿の声＞という宮自身を示していて、此処にまた更に重ねて求愛意を示しているようにも見える。しかも、「おほかたにやはあはれとも聞く」は＜並一通りのことではなしに感じ入る＞だから、姫が防戦でめぐらせた「ふたがれる籬」を正攻法で攻め立てる意図まで示されている。

*諸声は劣るまじくこそ(私の泣き声も宇治の牡鹿に負けません)」　*「もろごゑ」には、やはり匂宮は目ざとく食い付いて来た。匂宮が張り合う相手に意識したのは薫君なのだろう。姉姫は単に匂宮の贈歌に調子を合わせただけの心算だったようだが、不用意に使った「諸声」という言葉が匂宮の競争心を煽りそうな事は目に見えていた。というか、作者はそう読ませていた。

とあれど(と匂宮の御文にはあったが)、「あまり情けだたむもうるさし(あまり風流めくのも厄介だ)。*一所の御蔭に隠ろへたるを頼み所にてこそ(父宮の蔭に隠れていたのを逃げ場所と頼って)、何ごとも心やすくて過ごしつれ(何ごとも気楽に暮らして来たのだから)。心よりほかにながらへて(思いの他に先立たれて)、思はずなることの紛れ、つゆにてもあらば(不本意な間違いが少しでもあれば)、うしろめたげにのみ思しおくめりしなき御魂にさへ(心配でならぬと私たちに独身を通すように御遺言なされた亡き父宮の御霊魂にさえ)、疵やつけたてまつらむ(疵付け申してしまいます)」と(と姉姫は)、なべていとつつましう恐ろしうて(全てに気が引けて臆病になり)、聞こえたまはず(匂宮へ御返事申しなさいません)。　*「ひとところのおおんかげ」は注に＜故父宮をさす。＞とある。

この宮などを(姫君はこの匂宮の御文を)、*軽らかにおしなべてのさまにも思ひきこえたまはず(気軽に男が普通にする言い寄りなどとは思い申していらっしゃらないのです)。　*「軽らかに

おしなべてのさま」は注に＜『完訳』は「世間並の軽薄なお方などとは。匂宮には好色の噂もあるが、姫君たちはまだそれを見聞していない」と注す。＞とある。確かに、匂宮は兵部卿宮なのだから、決して軽い身分ではない王族だということは初めから分かっているので、此処で改めて言う話ではないだろう。が、匂宮は長谷参りの帰途に山荘の対岸の別荘で宴会をしていたのだから、およその人となりや噂話は姫君たちの耳にも入ったに違いない。が、姫君たち自身が世間知らずなので、その噂話の意味が良く分からなかった、という事かと思う。が、当文がそういう事情を言い表しているかと言えば、そうとも見えず、言い換えは難しい。

なげの走り書いたまへる御筆づかひ言の葉も（何気なく走り書きなさった御筆遣いや文言も）、をかしきさまになまめきたまへる御けはひを（気が利いていて優美でいらっしゃる匂宮の御手紙を）、あまたは見知りたまはねど（姫君は世の多くの恋文などはご存知なしに）、見たまひながら（御覧になって）、「そのゆゑゆゑしく情けある方に（その教養深く風雅に通じた向きの交際に）、言をまぜきこえむも（仲間入りして物申すのも）、つきなき身のありさまどもなれば（似合わない身の上の姫たちなので）、何か（今はもう）、ただ、かかる山伏だちて過ぐしてむ（ただこのように山伏のような人里離れた暮らしをして行こう）」と思す（と姫君たちはお思いになります）。

［第四段　薫、宇治を訪問］

中納言殿の御返りばかりは（中納言殿の御文へのお返事だけは）、かれよりもまめやかなるさまに聞こえたまへば（あちらからも実質の援助をして下さっていたので）、これよりも、いと*けうとげにはあらず聞こえ通ひたまふ（姫君からも形ばかりではない心からのお礼を申し上げて遣り取りなさいます）。　*「けうとうげ」は「気疎しげ（疎ましそう、余所余所しい）」のウ音便。

御忌*果てても、みづから参うでたまへり（薫中納言は御忌みが明けた頃に自ら宇治山荘をお訪ね申しなさいました）。　*「果てても」の「も」は程度表示の係助詞で＜ほどにも＞くらいの言い方、のようだ。であれば、この文は＜果てたるほどにも←果ててあるほどにも＞の＜あるほどに＞を省いた短縮形とも言えるのかも知れない。しかし、それにしても分かり難く感じるのは、「果てて」という「果てつ」の連用形に「も」が付いている形が、如何にも仮定条件の接続助詞「ても」と紛らわしく見えることにありそうだ。

*東の廂の下りたる方に*やつれておはするに（姫君たちが東廂の低い所に喪服姿で静まっていらっしゃったので）、近う立ち寄りたまひて（薫君は東の縁側から御簾近くに立ち寄りなさって）、*古人召し出でたり（弁の君を呼び出しなさいました）。　*「ひんがしのひさしのくだりたるかた」は注に＜寝殿の東廂の一段低くなった所。服喪中は一段低い所で過す。＞とある。東廂が低い造りになっていたのか、母屋のように畳で床上げしていなかっただけなのか、は分からない。畳みはなくても御座は敷いたのだろう。　*「やつれておはするに」は注に＜姫君たちが質素な喪服姿でいる。＞とある。　*「ふるびと」は注に＜弁の君。＞とある。

闇に惑ひたまへる御あたりに（悲しみに沈んで暗く閉じこもっていらっしゃる姫君たちに近い御簾内に）、いとまばゆく匂ひ満ちて入りおはしたれば（薫君がとても目映く匂い満ちて入っていらっしゃったので）、かたはらいたうて（姫たちはきまり悪く）、御いらへなどをだにえしたまはねば（直答などはとてもお出来にならなかったので）、

「*かやうには（そのように）、もてないたまはで（構えて押し黙っていらっしゃらずに）、*昔の御心むけに従ひきこえたまはむさまならむこそ（故宮の御意向に従いなさって私を親しく頼って

下さってこそ)、聞こえ承るかひあるべけれ(伺って御世話を承る張り合いがあるというものです)。　*「かやう」とは「かたはらいたうて御いらへなどをだにえしたまはね」でいる姫君たちの態度なのだろう。*「むかしのみこころむけ」は注に＜故宮のご意向。＞とある。

なよびけしきばみたる振る舞ひを*ならひはべらねば(風流に言い寄って振舞う真似をする心算はありませんので)、人伝てに聞こえはべるは(取次で御話し申すのでは)、*言の葉も続きはべらず(御用向きの話も進みません)」　*「ならふ」は＜慣れる＞の他に＜真似る＞という語用もあり、此処では後者だろう。　*「ことのは」は＜言葉＝話＞だが、「なよびけしきばみたる」ものではない「聞こえ承る」ものなら、それは＜御用向きの話＞なのだろう。

とあれば(と薫中納言の話があると)、

「あさましう(意味も無く)、今までながらへはべるやうなれど(今まで生き永らえているようでも)、思ひさまさむ方なき夢に*たどられはべりてなむ(覚ましようもない夢に彷徨っておりまして)、*心よりほかに空の光見はべらむもつつましうて(不相応に思えて晴れやかな空の光を見るのも気が引けて)、端近うもえみじろきはべらぬ(庭先近くにはとても居た堪れません)」　*「たどる」は＜たどたどしく間誤付く→彷徨う＞。　*「心よりほかに」は＜思いの他に＝意外なことに＞ではなく、自分の考えがあった上でそれとは違う、という＜間違いに思えて＞くらいの言い方かと思う。

と聞こえたまへれば(と姉姫が取次でお応えなされば)、

「ことといへば(そのことについては)、限りなき御心の深さになむ(限りない御思慮深さとのように、存知ます)。月日の影は(月や日の光は)、御心もて晴れ晴れしくもて出でさせたまはばこそ(御自身から進んで、それらに照らされた世の中を遊び暮らそうとなさるなら)、罪もはべらめ(喪中には相応しくないでしょうが)、*行く方もなく(そのように気晴らしの方法もないというのも)、いぶせうおぼえはべり(気懸かりに存じます)。*また思さるらむは(更に重ねてあなた様が悲嘆に暮れなさるのを)、しばしをも、あきらめきこえまほしくなむ(少しでもお晴らし申したく、思っております)」　*「ゆくかたもなし」は＜気晴らしの方法が無い＞ということらしく、姫君の「晴れ晴れしくもて出でさせたまふ」ことについての薫君の評価なのだろうが、「御」の敬称が無いのは、「罪もはべらめ」に引き続いて、一般論の言い方を取っているからなのだろう。また、そういう構文なので、「罪もはべらめ」は此処で句点文節とならず、逆接で下に続く読点の校訂になる、かと思う。　*「また」は＜また別に＞ではなく＜更に重ねて＞の語用だろう。「思さるらむ」は＜姫がお思いになるだろう事＞で、その中身は喪中につき＜悲嘆に暮れる＞という事になる文脈のようだ。こういう婉曲表現は相変わらず分かり難い。

と申したまへば(と中納言が申しなさると)、

「*げに、こそ(御尤もです)。いとたぐひなげなめる御ありさまを(まことに比類無きほどに悲しんでいらっしゃる姫君たちを)、慰めきこえたまふ御心ばへの浅からぬほど(慰め申しなさる中納言殿のお気遣いの厚いことです)」など(などを弁の君は姫君に)、聞こえ知らす(お話し聞かせ申します)。　*「げにこそ」は注に＜以下「浅からぬほど」まで、女房の詞。＞とある。が、先に「古人召し出でたり」とあったので、是は弁の弁と見て置きたい。

［第五段　薫、大君と和歌を詠み交す］

御心地にも（姫君は御自分でも）、さこそいへ（いくら喪中とは言っても）、やうやう心しづまりて（次第に落ち着いて）、よろづ思ひ知られたまへば（いろいろ考えて御覧になれば）、*昔ざまにても（中納言殿は以前から故父宮と懇意だったことからして）、かうまではるけき野辺を分け入りたまへる心ざしなども（このように都から離れた宇治の野辺を分け入ってお越し下さるという親切さなのだろうと）、思ひ知りたまふべし（お思いになったようで）、すこしゐざり寄りたまへり（すこし外の方へ膝を進めなさいました）。　*「昔ざまにても」は注に＜『集成』は「亡き父宮への交誼からであるにしても」。『完訳』は「薫の殊勝な厚志は姫君たちも分るはずと、語り手が推測」と注す。『岷江入楚』所引の三光院実枝説は「此段大君の心を察して草子地にかけるなり」と指摘。＞とある。「むかしざま」は＜昔からの誼＞で、「にても」は＜～であることからしても＞という理由説明項だから、「も」の強調意は「心ざしなども」の「なども」に＜などというように＝なのだろうと＞という推定構文として掛かる助詞だ。

*思すらむさま（喪中の姫君たちがお嘆きであろうことや）、また*のたまひ契りしことなど（また故宮が姫君たちの御世話を依頼なさり薫君が引き受けたことなど）、いとこまやかになつかしう言ひて（とても詳しく親しげに話して）、うたて雄々しきけはひなどは見えたまはぬ人なれば（嫌気する荒々しさなどはお見せにならない中納言殿だったので）、け疎く*すずろはしくなどはあらねど（姫君は疎ましく不安になることはなかったが）、　*「思すらむさま」は注に＜大君の心中。＞とある。分かり難い注だが、基本的に地文であるこの文に於いて、この当文箇所は＜主語は姫君だ＞ということらしい。「さま」は姫の＜様子＞だろうが、薫君から見れば＜様子である事＞で、この当文箇所が薫君目線であることが、実にややこしい。語り手自身は、これから話すことで、複数の登場人物を多角的に説明しようとしているわけだから、主語省略で話が分かり難くなりそうなことぐらい予見できるだろうに、本当に気が知れない。　*「のたまひ契りしこと」は注に＜故八宮が薫に約束したこと。＞とある。当巻二章一段にも、八宮は薫君に「亡からむ後この君たちをさるべきもののたよりにもとぶらひ思ひ捨てぬものに数まへたまへ」と、自分の死後の姫君たちの世話を頼み、薫君は引き受けると約束していた。　*「すずろはし」は＜そわそわと落ち着かない＞と古語辞典にある。期待に胸躍るような時にも使う語らしいが、此処では＜不安感＞なのだろう。

知らぬ人にかく声を聞かせたてまつり（縁者でも無い人にこのように声をお聞かせ申し上げ）、*すずろに頼み顔なることなどもありつる日ごろを思ひ続くるも（つい頼りにしてきてしまった日頃の経緯が思い出されるのも）、さすがに苦しうて（それなりに負い目で）、つつましけれど（気が引けるが）、ほのかに一言などいらへきこえたまふさまの（ほんの一言ながらお応えなさる姫君の姿が）、げに、よろづ*思ひほれたまへるけはひなれば（いかにもいろいろと考え疲れていらっしゃるようなので）、いとあはれと聞きたてまつりたまふ（薫君はとてもいたわしくお聞き申し上げなさいます）。　*「すずろ」は＜漫然である、何となく、やたら、軽率＞などとあるが、此処では成り行き任せで＜つい甘えた＞みたいな事情だろう。　*「思ひ惚る」は＜考えて放心する＝考え疲れする＞。

黒き几帳の透影の（喪中用の黒い几帳から透き見える姫君の姿が）、いと心苦しげなるに（とても痛々しく）、ましておはすらむさま（ますます姫の御心中や）、*ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて（昨秋にほの見た明けぐれの別れ際の姫の姿などが思い出されて）、　*「ほの見し明けぐれ」は注に＜「橋姫」巻の垣間見の場面をさす（第三章三段）。＞とある。ただ、明けぐれというのは三章七段の別れ際の姫の姿、かと思う。

「色変はる浅茅を見ても、墨染にやつるる袖を思ひこそやれ」（和歌 46-10）

「墨染に 浅茅も変わる 秋の色」（意訳 46-10）

*「浅茅（あさぢ）」はチガヤ、またチガヤの群生野をいうらしい。チガヤは空地で良く見かけるイネ科の雑草で空には葉が赤く変わるとのことで、ウエブ上にも多くの画像がある。山荘の庭先にも生えていたのだろうか。しかし、枕になる場面描写は無い。それとも、あまりに有り触れた光景で、特に言うまでもないと作者は思ったのかも知れない。で、「浅茅」が「色変はる」のを見るにつけても、「色変はる」と言えば＜喪服に着替える＝服喪する＞という意味なので、「墨染にやつるる」あなたの涙に濡れた「袖を思ひこそやれ（袖が思い遣られる）」という洒落語用の歌筋らしい。「墨染にやつるる袖」は「黒き几帳の透影」ではあるのだろうが、何か逸話に因む言い回しになっていて、それが歌意であるかのように思えてならない。が、何の下話も、古歌の参照指摘も無い。このままでは洒落語用だけの歌にしか見えない。それもほんの言葉尻だ。分からない。

と（と薫君が）、独り言のやうにのたまへば（独り言のように仰ると）、

「色変はる袖をば露の宿りにて、わが身ぞさらに置き所なき　（和歌 46-11）

「涙は袖にたまるのに、この身はもう居たたまれない　（意訳 46-11）

*はつるる糸は」　*注に＜歌に添えた言葉。『源氏釈』は「藤衣はつるる糸は侘び人の涙の玉の緒とぞなりける」（古今集哀傷、八四一、壬生忠岑）を指摘。喪服を着て涙ながら暮らしている、意。＞とある。「ふぢごろも」は＜質素な衣服→喪服＞という語用でみあるが、元々が＜クズの繊維で織ったほつれ易い粗末な衣服＞ということから、是も言葉遊びで詠まれた趣きの歌だ。ほつれた糸を数珠玉を繋ぐ糸に見立てる、というのも、悲しみに暮れると言うよりは、似た形態を愉しむ気分だ。喪中謹慎はそれ自体は湿っぽいものだろうに、歌詠みに於いてはダジャレの軽さがある。笑い飛ばす所までは行かないが、十分に冷静な精神状態が窺える。

と末は言ひ消ちて（と姫君はその先は言わずじまいにして）、いと*いみじく忍びがたきけはひにて入りたまひぬなり（如何にも非常に悲しそうなふりをして奥の間にお入りなさってしまったのです）。　*「いみじく忍びがたきけはひ」は上の歌の贈答を見た後では、何とも芝居がかった姫の仕種に感じる。少なくも、姫が薫君に好印象を持ったらしい、という作者の思わせぶりに見える。

［第六段　薫、弁の君と語る］

ひきとどめなどすべきほどにもあらねば（その姫を引き止めたりすべき風流ごとの場合でもないので）、飽かずあはれにおぼゆ（薫君は惜しんで印象深く感じます）。

老い人ぞ（年老いた弁の君が）、*こよなき御代はりに出で来て（とんでもない姫の代役として出て来て）、*昔今をかき集め（昔の人の不幸や今度の八宮の不幸などを取り上げて）、悲しき御物語ども聞こゆ（悲しみのほどなどを話し申します）。　*「こよなし」は良くも悪くも＜程度が甚だしい＞という言い方らしく、此処では冗談めかした語り口にしても、当然に悪評だ。 *「むかしいま」は注に＜昔は柏木のこと、今は八宮のこと、をさす。＞とある。

ありがたくあさましきことどもをも見たる人なりければ(世にも稀な驚くべき事の数々を見て来た人なので)、かうあやしく衰へたる人とも思し捨てられず(薫君はこの弁を見苦しい老人とも見放しなさらず)、いとなつかしう語らひたまふ(とても親しく語らいなさいます)。

「いはけなかりしほどに、故院に後れたてまつりて(幼かった時に父六条院に先立たれ申しまして)、いみじう悲しきものは世なりけりと(非常に悲しいものが人生なのだと)、思ひ知りにしかば(思い知りましたので)、人となりゆく齢に添へて(成人するに従って)、官位(つかさくらゐ、出世や)、世の中の匂ひも(世の中の風雅も)、*何ともおぼえずなむ(特に執着はありません)。 *「何ともおぼえずなむ」は＜何とも思わない＞という言い方ではあるだろうが、現代語でも同様だが、是は＜何も感じない、何も思わない＞という意味ではない。「何とも」の「なに」は＜特に気掛かりな何らかのもの＝執着のあるもの＞を指していて、「何とも思わない」は＜特に気にはしない←特に執着は無い＞という意味だ。今でも普通に言う言い方なので、特にノートするまでもないようにも思いつつ、薫君の女好きは匂宮巻二章五段に理路整然と述べられていて、その説得力が妙に印象深く、このようにノートしないと、薫君が大嘘吐きみたいに見える気がして、とても気になった。序でに言えば、出世についても、薫君は冷泉院が特に寵愛して加階させていて、自分で苦労した訳では無いので執着が無いのであり、出世のために血反吐を吐くような苦労を重ねた者なら、それこそが自分の人生の全てであり、執着の塊であるのは当然だ。出世も所帯を構えることも人生の重大事であることは、ヒトはそういう生命体だと言う定義に等しいほどの基本認識であって、個体の立ち位置や性能は無常観という処世法の前に個人にも社会にも提示されている課題要素なのであって、是等に興味が無い、などという言い種は、ざっと恵まれた者の戯言ではある。興味があって、断ち切りがたい事だからこそ、冷静な判断を下すべく勉強し、経験を積み、時には仏教式の修行もするのだろうに。

ただ、かう静やかなる御住まひなどの(ただ、このように静かな御生活ぶりを)、心にかなひたまへりしを(納得していらっしゃった八宮が)、かくはかなく見なしたてまつりなしつるに(こうして亡くなってしまわれると)、いよいよいみじく(ますます深く)、かりそめの世の思ひ知らるる心も、*もよほされにたれど(無常の世と思い知らされる出家心も私には起こりましたが)、*心苦しうて(及ばずながら)、とまりたまへる御ことどもの(後に残っていらっしゃる姫君たちを)、ほだしなど聞こえむは(放り出せないなどと申すのは)、かけかけしきやうなれど(恩着せがましいようですが)、*ながらへても(八宮より生き永らえたからには)、かの御言あやまたず(ご遺言に違わず)、聞こえ承らまほしさになむ(御世話を仕り申したく存じます)。 *「もよほされにたれど」は注に＜出家を思わぬでもないが、の意。＞とある。明示補語する。 *「心苦し」は＜自分の至らなさが相済まない→及ばない＞という言い方、かと思う。 *「ながらへても」の「も」は強調説明の係助詞で＜なのだから＞という言い方、かと思う。当段では、この「ても」の語法が多用されている。

さるは(しかしながら)、*おぼえなき御古物語聞きしより(思いがけない昔話を聞いたことにより)、いとど世の中に*跡とめむともおぼえずなりにたりや(ますます自分が世の中に生きる価値のある存在とも思えなくなってしまいました)」 *「おぼえなきおおんふるものがたり」は注に＜柏木と薫の出生に関する話。＞とある。 *「跡留む」は＜足跡を留める→生きた証を残す→生きる価値を標す＞。

うち泣きつつのたまへば(薫君が泣きながらそう仰ると)、この人はましていみじく泣きて、えも聞こえやらず(この人はそれ以上に深く泣いて何も申せません)。御けはひなどの(薫君の雰囲気が)、*ただそれかとおぼえたまふに(まるで故衛門督にそっくりに見えなさって)、年ごろうち

忘れたりつるいにしへの御ことをさへとり重ねて(長いこと忘れていた在りし日の藤原君のことまで弁の君は薫君に重ね思い浮かべて)、聞こえやらむ方もなく(お応え申しようもなく)、*おぼほれゐたり(涙にむせんでいました)。　*「ただそれかとおぼえたまふに」は注に＜柏木そっくりに思われる。「たまふ」は薫に対してつけられた敬語。＞とある。　*「おぼほる」は大辞林に「溺ほる・惚ほる」と漢字表記され＜溺れる。涙にむせぶ。専らそればかりする。惚ける。＞とある。此処ではその全てを含ませた語用に見えるが、言い換えとしては＜涙にむせぶ＞が良さそうだ。

*この人は、*かの大納言の御乳母子にて、*父は、この姫君たちの母北の方の、母方の叔父、左中弁にて亡せにけるが子なりけり。　*「この人は～」は注に＜以下、弁の素姓についての説明。＞とある。此処に来て素性を述べる、というのは、まるで推理小説だ。しかし、先に明かしても、この人の立場が変わるものでもなし、薫君がこの人の素性を知ったことで、秘密を話せなくなったとも思えないし、まして、薫君が今知った、とも思えず、何故此処で明かすのか、何故今まで語らなかったのか、私には全く分からない。　*「かの大納言の御乳母子にて」は注に＜柏木の乳母子。＞とある。このことは橋姫巻三章六段に「かの権大納言の御乳母にはべりしは、弁が母になむはべりし。」という言い方で既に語られていた。　*「父は～」は初めて語られる。注には＜弁の父親は姫君たちの故母北の方の叔父にあたる人で左中弁で亡くなった人。弁と姫君たちの母親は従姉妹どうし。弁にとって姫君たちは従姉妹の娘たち。弁の呼称は父左中弁に由来する。＞とある。この人が弁官の縁者であろう事は予測できたし、父君が左中弁だったというのは想定内ではある。官位表によれば左中弁は正五位上とある。幹部の上達部ではないが高級官僚の殿上だ。ところで、此処に語られている説明では、弁の君は八宮の北の方の従姉妹に当たるという縁故で、この宮邸に仕えているように聞こえるが、橋姫巻四章三段には薫君に事情説明する弁自身の言葉で「この宮は、父方につけて、童より参り通ふゆゑはべりし」と語られていて、そのことと此処の話の整合性がどうなっているのかは気になるところだ。また、姫君たちから見て、母の従姉妹はほぼ伯母だろう。通りで、この人が貫禄があるのも頷けるし、重大な秘密を独断で明かせるという立場も納得出来る。薫君は当初からこの人の素性を知っていたに違いない。でなければ、このような微妙な話を、衛門督の手紙という証拠があるにしても、それなりの立場の人の話でなければ、そも信じる気には成れない筈だ。とは言え、私でさえ大体見当を付けた所にそうは違わないこの人の素性であり、当時の読者であれば、普通に察しの付く筋ではあったのかも知れないが、であれば尚更、今まで明かさなかったことの意味が分からない。然して意外な話でもなく、此処で素性を明かされても印象は変わらない。勿論、納得は出来たし、気分は落ち着いたが、この人の素性が主たる興味で此処まで読み進んで来たものでもなく、どうもこの作者の話の引っ張り方は苛立たしい所がある。とはいうものの、一般的に、話や物事への興味は、分からない事を一つ一つ明らかにして行く事で繋がれる、という面はやはりあるような気はする。

年ごろ、*遠き国にあくがれ(長年遠い国を流浪して)、*母君も亡せたまひてのち(姫君たちの母君である従姉妹もお亡くなりになった後は)、*かの殿には疎くなり(あちらの藤原家には疎遠となっていたので)、この宮には(此方の八宮にあっては)、尋ね取りてあらせたまふなりけり(引き取り下さっていたのです)。　*「遠き国にあくがれ」は注に＜「橋姫」巻に「西の海の果て」（西海道の薩摩国）まで流浪したとあった（第四章四段）。＞とある。此処の文の内容は既に語られたことの繰り返しで、確認のような趣きだ。　*「母君も亡せたまひてのち」は注に＜姫君たちの母北の方。敬語があるので、弁の母ではない。＞とある。確かに間違え易い箇所で、鋭い指摘だ。どう間違えるかと言えば、「かの殿には疎くなり」の「疎くなり」が、「母君も亡せたまひてのち」に、その「母君も亡せたまひ」たことが原因で＜疎くなった＞という文意に見え易い、という所為なのかも知れない。が、弁の君は疾うに藤原家と疎遠になっていた。その具体事情は、弁自身が夫に付いて西国へ遠ざかったからであり、その西国行きを決心したのも、故衛門督に託された遺言の処分が荷が重過ぎての逃避行でもあったらしく、言ってみれば、弁自身が藤原家を避けたのであって、弁の母は疾うに死んでいたか、

ともかく、母の縁故は弁が故藤原君に女房仕えしたことで済んでいて、後は弁自身が藤原家に難しい問題を抱えていたのだ。で、此処の構文自体を見直せば、「母君も亡せたまひてのち」は、理由や原因を説明しているのではなく、単に事態推移を説明した言い方で、その時点での事情のひとつが「かの殿には〜」であり、また、もうひとつの事情が「この宮には〜」である、と並列に諸事情を示している、ということらしい。　*「かの殿」は注に＜弁がかつて仕えていた故柏木の太政大臣家。＞とある。「には」の係助詞は＜〜の場合には＝〜では＞という個別事情の説明語用。したがって、「疎くなり」の「なり」の連用中止は、此処で＜疎くなった＞という事態推移ではなく、現状説明の＜疎くなっていたので＞という事情説明を文意する、かと思う。文法上の整合性は良く分からないが、例えば＜疎くなりせば＞の＜せば＞が省かれた形とか、「なり」を状態説明の論理助動詞と見て＜疎かるなれ＞の日常的簡易表現に見做す、とかいう解釈が出来るのかも知れない。

人もいとやむごとなからず(身分も特に高くなく)、*宮仕へ馴れにたれど(他家に仕え馴れて当家の作法に馴染まないこともあるかも知れないが)、*心地なからぬものに宮も思して(貴人の心得が無いでもない人に八宮もお思いになって)、姫君たちの御後見だつ人になしたまへるなりけり(姫君たちの御相談役のようになさっていたのでした)。　*「みやづかへなれ」は他家の作法に馴れた＜作法違い＞と＜訳知り顔＞の扱い難さ、を言うのだろう。 *「ここちなし」は＜心構えがない＞と古語辞典にある。此処で言う「心構え」とは、一般常識、というよりは、貴人の心得、かと思う。

*昔の御ことは(昔の御事情は)、年ごろかく朝夕に見たてまつり馴れ(長年このように毎日お世話申し親しんで)、心隔つる隈なく思ひきこゆる君たちにも(隠し事の無い関係と思い申し上げる姫君たちにも)、一言うち出で聞こゆるついでなく(一言も漏らし申すことなく)、忍びこめたりけれど(弁の君は秘匿していたが)、　*「昔の御こと」は注に＜故柏木の事。＞とある。確かに、狭く言えば、弁が背負った直接の物は故衛門督から託された＜御文ども＞であり、その扱いには違いないが、意味としては、藤原君と女三の宮の密通事件と、その結果として誕生した薫君の存在、という事情全体になる。是等を「むかしのおおんこと」の一言で言う語用は幾分かは舌足らずに見えるが、この人の話題が主にこの件に関わるというこの文脈であれば、大体見当の付く言い方ではある。が、この「昔の御ことは」を受ける述文は「忍びこめたりけれど」であり、その間の「年ごろかく〜聞こゆるついでなく」が挿入にしては長過ぎて、この構文は「昔の御ことは」「見たてまつり馴れ」という文意に見えがちで、かなり紛らわしい。

中納言の君は(中納言の薫君は)、「古人の問はず語り、皆、例のことなれば(老人が聞かれもしないのに昔話をするのは、誰にもある普通の事なので)、おしなべてあはあはしうなどは言ひ広げずとも(誰彼の見境も無く軽率に言い触らしたことはなくても)、いと*恥づかしげなめる御心どもには(とても遠慮が過ぎる姫君たちに於かれては)、聞きおきたまへらむかし(恐らく我が出生の秘密を知って、卑しんでいらっしゃるのだろう)」と推し量らるるが(と推し量られるのが)、ねたくもいとほしくもおぼゆるにぞ(不快であり取り繕いたくも思えることから)、「またもて離れてはやまじ(やはり放っては置けない)」と、*思ひ寄らるるつまにもなりぬべき(と姫君たちに関心を寄せる端緒にもなったようです)。　*「恥づかしげなめる御心ども」は＜恥ずかしく思っていそうな姫君たち＞だから、この「恥づかしげ」は薫君が恥ずかしくなるような＜姫の立派さ＞ではなく、姫たちが＜遠慮がちにしていること＞を言っているのであり、父君の八宮から促されても躊躇する姫の「恥づかしげ」な態度を、薫君は＜単に世慣れていない＞のではなく＜我が出生を卑しんでいる＞のだと深読みした、という文意らしい。が、難文だし、問題の複雑さを思えば、如何にも雑な語用に見える。分かり易い文にする為に、私見は推論ながら、思い切って補語する。　*「思ひ寄らるるつまにもなりぬべき」は注に＜『集成』は「自分の出生の秘密を守るためという

動機も、薫の姫君たちへの思わくの中にあることを説明する草子地」。『完訳』は「語り手の評。自分の出生の秘密を封じ込めるとして、姫君接近を合理化することにもなる」と注す。＞とある。「なりぬべき」の連体形の文末は、「おぼゆるにぞ」の「ぞ」という解説意の係助詞を受けて、上文を因とする事象を示す構文。論説結句として、下に「ものなり」が暗意されるが故の連体形。

［第七段　薫、日暮れて帰京］

*今は（八宮亡き今となっては）旅寝も*すずろなる心地して、帰りたまふにも（女所帯となっている山荘に宿寝するのも外聞が悪い気がして、薫の中納言殿はお帰りになる時にも）、「これや限りの（是が最後になるかもしれない）」など*のたまひしを（など八宮が仰っていたのを）、　*「今は」は与謝野訳文に山荘について＜女ばかりの家族の所＞という言い方がしてあって、八宮亡き今や山荘が女所帯となっていることを示す適格な補語かと、従いたい。　*「すずろ」は＜何となくそわそわと浮ついている。軽薄だ。＞という形容動詞らしいが、此処の「すずろなる心地」は＜軽薄に見られそうな危惧→傍目に落ち着かない気分＞なのだろう。　*「のたまひし」の主語は八宮。当巻二章二段には、八宮が薫君に「かかる対面もこのたびや限りならむと、もの心細きに忍びかねて、かたくなしきひが言多くもなりぬるかな」と語る場面があった。

「などか（まさか本当には）、さしもやは（そんなことはないだろう）、とうち頼みて（と軽く考えて）、また見たてまつらずなりにけむ（二度とお会い申さずじまいになってしまった）。*秋やは変はれる（前回の訪問も今回の訪問も、同じ秋のことに変わりはないものを）」、あまたの日数も隔てぬほどに（ということで、然して日数も数えぬ内に）、おはしにけむ方も知らず（八宮の行方も知れずとは）、あへなきわざなりや（何と頼りないことでしょう）。　*「秋やは変はれる」は薫君の内心文と地文が重なっている、と読んで置く。渋谷校訂では、以下の「移したてまつりてむとす」という僧の言葉までを薫君の内心文としてあるようだが、また当該部分までは薫君の目線による文だとは思うが、内心文にしてはあまりに説明口調な言葉遣いの不自然さからして、私は以下を地文と見たい。なお、この文によって、今現在がまだ秋の九月中の話と明示されることには留意したい。注には＜『完訳』は「八の宮と対面したのも八の宮の死に遭ったのも、同じ今年の秋ではないか。短日月の間に移り変る無常を詠嘆」と注す。＞とある。

*ことに（それにしても）、例の人めいたる御しつらひなく（普通の貴人めいた飾り付けもなく）、いとことそぎたまふめりしかど（ごく簡素になさっていらしたようで）、いとものきよげにかき払ひ（実にさっぱりと整理されて）、あたりをかしくもてないたまへりし御住まひも（庭の造作も無常観を表わしていらっしゃった八宮の御住居も）、*大徳たち出で入り（山寺の僧たちが立ち入って）、こなたかなたひき隔てつつ（あちらこちらに間仕切りして追善供養に詰めていて）、*御念誦の具どもなどぞ（八宮の仏具類などは）、変らぬさまなれど（変わりなく供えられているようだが）、*「ことに」が＜殊に＞だとすると、それが「例の（普通の）」に掛かる奇妙さは、冗句でない限り文意が成立しない。この「ことに」は話題の目先方向を変える前置強調の「事に（時に、さて、それにまた）」であり、語りとしても此処で一呼吸置く筈で、私は読点を置きたい。　*「大徳」は「だいとこ」と読みがある。「だいとく」とも言うらしいが、「とく」が「とこ」に転じる理由は、ずっと疑問だが未だに分からない。元の意味は＜名僧。高僧。＞を言ったらしいが、一般に僧への尊称としても語用されたようで、此処では山寺を敬った語用なのだろう。　*「おおんねんじゅのぐども」の「御」は八宮への尊称で＜八宮がお使いになっていた仏具＞。

「仏は皆かの寺に移したてまつりてむとす(仏像は全て山寺に移し奉ることとする)」と聞こゆるを(と僧が申しているのを)、聞きたまふにも(お聞きになると)、かかるさまの人影などさへ絶え果てむほど(喪も果てて、こうした人たちまで居なくなってしまった時に)、とまりて思ひたまはむ心地どもを汲みきこえたまふも(後に残って悲嘆に暮れなさるであろう姫君たちのお気持ちを察し申しなさっては)、いと胸いたう思し続けらる(薫君はとても胸が痛く思い続けられなさいます)。

「いたく暮れはべりぬ(だいぶ日も暮れました)」と申せば(と従者が申せば)、眺めさして立ちたまふに(薫君が限をつけて出立なさる時に)、雁鳴きて渡る(かりなきてわたる)。

「秋霧の晴れぬ雲居にいとどしく、この世をかりと言ひ知らすらむ」(和歌 46-12)

「秋霧の 雲の高さに 雁は鳴く」(意訳 46-12)

*注に＜薫の独詠歌。『河海抄』は「雁の来る峰の朝霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中の憂さ」（古今集雑下、九三四、読人しらず）。『河海抄』は「行き帰りここもかしこも旅なれや来る秋ごとにかりかりと鳴く」（後撰集秋下、三六二、読人しらず）「ひたすらに我が思はなくに己さへかりかりとのみ鳴き渡るらむ」（後撰集秋下、三六四、読人しらず）。『源註拾遺』は「常ならぬ身を秋来れば白雲に飛ぶ鳥すらもかりとねをなく」（新撰万葉集、秋）を指摘。「雁」と「仮り」の掛詞。「雁」は鳴く音でもある。＞とある。「仮り」は＜間に合わせの一時的なもの＞で、「かりかりと鳴く」はいっそう軽く愚弄する音感で、鳥に愚弄されるかの自虐的な滑稽さで、不都合を笑い飛ばそうという心意気を示す歌詠みが多そうだ。「秋霧の晴れぬ雲居」は＜秋の曇り空＞であり＜悲しみに涙がちな山荘＞であり＜隠れた王族＞である。ところで、私は都会暮らしの所為か、「雁」がマガンだとすると、あのような大型の野鳥が生きる大地の豊かさが、とてつもなく尊いものに思えてならない。

［第八段　姫君たちの傷心］

兵部卿宮に対面したまふ時は(薫中納言は匂兵部卿宮に対面なさる時は)、まづこの君たちの御ことを*扱ひぐさにしたまふ(先ずこの姫君たちの事を話題になさいます)。　*「あつかひぐさ」の語自体は＜話題＞と言い換えて良いように思うが、その話の中身は何なのか。当然に、薫君は匂宮に、姫君たちは喪に服して悲しんでいた、とは話すだろう。が、薫君がどういう魂胆で匂宮に姫君たちの事を知らせるのか、を読者に謎掛けるかの「あつかひぐさ」という言い方に見えるし、薫君の思いは複雑で、もしかすると彼自身も真意を見失いかけているのかも知れず、正にその複雑さを思わせているようにも聞こえる。

「*今はさりとも心やすきを(今は薫君に後れを取ったが、それだけに遠慮は要らないわけだ)」と思して(と薫君から姫君の近況を聞き知ってお思いになり)、宮は、ねむごろに聞こえたまひけり(匂宮は熱心に宇治の姫君にお手紙を差し出し申しなさったのです)。　*「今はさりとも心やすきを」は注に＜匂宮の心中。八宮が亡くなった今となってはけむたい存在もいなくなって、の意。＞とある。そして訳文には＜今はそうはいっても気がねも要るまい＞とある。分からないのは「そうは言っても」の「そう」が何を指すのかだ。上文を受ける文意なら、匂宮は薫君から姫君たちの近況を聞いたのであり、とは言え、薫君は勿論、宇治にも、山荘にも、老女にも、そして姫君たちにも、多くの複雑な思いを持っているだろうが、匂宮には表面上の話しか出来ない筈なので、姫君たちは悲しみに暮れていた、と聞かされただろうから、この「さりとも」は＜悲しんでいても＞になりそうだ。が、匂宮にとって＜姫君の悲しみ＞は外聞のひとつであって、薫君の話の焦点は実際に宇治

に出向いて姫君に対面したという一点に匂宮には聞こえた筈で、まして匂宮自身も宇治へは手紙を送っているのであり、むしろ薫君の話しっぷりからは、中納言には頻繁に姫からの返信があるかに聞こえるのに比して、自分には返信が少ない、ということを気にしていたとすれば、この「さりとも」は薫君への対抗心から＜自分が出遅れていても＞という、より積極性を示した文意になる。そして、匂宮はそれらを勘案しての「さりとも」という内心判断を持ったとすれば、言い換え文としては＜それだけに＞という焦燥感を示すべきだろう。で、そうなると、「心やすきを」だが、是は与謝野訳文に＜反対されるかもしれぬ父君の親王もおいでにならなくなって、結婚はただ女王の自由意志で決まるだけであると見ておいでになって＞とあるような、親族に気を使わずに済む気安さなどではなく、と言うより、そんな気遣いは匂宮には端から無いと思うが、むしろ喪中とは言え薫君には物越しながらも対面したという姫君の無事を安堵して、それなら自分も遠慮なく参戦できる、くらいの気分かと思う。つまり、「今は」は＜八宮亡き今となっては＞ではなく、喪中とは言え忌明けした＜現在の姫の状態なら＞である。

はかなき御返りも（しかし、少しばかりのお返事すら）、聞こえにくく*つつましき方に（申し上げにくい畏れ多い方だと）、女方は思いたり（相手の女の方の姫君は匂宮を思っていらしたのです）。　*「つつまし」は＜慎むべき＝遠慮すべき＝畏れ多い＞。

「世にいといたう好きたまへる御名のひろごりて（匂宮は世にとても好色でいらっしゃる御評判が広がって）、*好ましく艶に思さるべかめるも（私たちを興味深く風流にお思いなさっているようでも）、かういと埋づもれたる*葎の下よりさし出でたらむ手つきも（このようにとても深く埋もれた雑草の下から差し出すような手紙も）、いかに*うひうひしく（如何にも世慣れず）、*古めきたらむ（陳腐なことだろう）」など*思ひ屈したまへり（などと姫君は劣等感に苛まれなさいました）。　*「好ましく艶に思さる」の主語は敬語遣いからして匂宮であり、であれば「好ましく艶」と評価される対象は姫君自身なのだろう。　*「葎（むぐら）」は＜野原や荒れた庭などに繁茂する雑草の総称。ヤエムグラ・カナムグラなど。うぐら。もぐら。＞と大辞林にある。　*「うひうひし」は＜物慣れないで幼い感じがする。世間慣れしていないで、若々しく新鮮にみえる。＞と大辞泉にある。　*「古めく」は＜古びてみえる。古風である。旧式である。＞と大辞泉にある。此処では＜旧式＝時代遅れ＞という意味よりも、「今めく」の対語で＜今時じゃない＝陳腐だ＞という語感。　*「思ひ屈す（おもひくっす）」は＜劣っていると自覚する→劣等感に苛まれる＞。

「さても、あさましうて明け暮らさるるは、月日なりけり（それにしてもあっという間に過ぎ去る月日の早さですね）。かく、頼みがたかりける*御世を（これほど頼りなかった父宮の御急逝を）、*昨日今日とは思はで（昨日今日の間近なこととは思わずに）、ただおほかた定めなきはかなさばかりを（ただ世の中全般の無常ばかりを）、明け暮れのことに聞き見しかど（毎日の出来事として見聞きしていましたが）、*我も人も後れ先だつほどしもやは経む（私も父宮も、片や後に残り、片や先立つ、という隔たりのある時間がこのように経ることはあるまい）、などうち思ひけるよ（などと思っていたんですね）」　*「みよ」は＜父宮の寿命。＞と注にある。　*「きのふけふとは」は注に＜『河海抄』は「遂に行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」（古今集哀傷、八六一、在原業平）を指摘。＞とある。が、「昨日今日とは」は日常感覚に即した普通の言い方で、むしろ日常語は避けるという歌詠みの形からすれば、参照歌の方が歌らしくない印象で、それでも訃報に際した事自体の非日常性が共感を得た、ように私は感じる。　*「我も人も後れ先だつほどしもやは経む」は注に＜『源氏釈』は「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」（古今六帖一、雫）を指摘。『集成』は「父宮に先立たれて自分たちが生き永らえようなどとは思ってもみなかった、の意」と注す。＞とある。特に気になるのは「ほどしもやは経む」という言い方だ。「やは経む」は反語表現なので＜経ることはない＞だが、「ほどしも」の「し」は強調の副助詞と言うよりは、具体的に上文の

「さてもあさましうて明け暮らさるるは月日なりけり」を既定事実として認識する過去の助動詞「き」の連体形と読むべき語用であって、「ほどしも」は「ほどのかくも」を口語ならではの省略で短縮することで、思いの強さを表わした言い方であるらしい。

「*来し方を思ひ続くるも（父宮ご存命中の是までの生活を考えてみても）、何の*頼もしげなる世にもあらざりけれど（何の栄えある境遇ではなかったが）、ただいつとなくのどやかに眺め過ぐし（ただいつでものんびりと庭を眺め暮らして）、もの恐ろしくつつましきこともなくて経つるものを（不安に萎縮することもなく過ごして来ましたが）、*風の音も荒らかに（父宮亡き今や、風の音も吹き荒れて）、*例見ぬ人影も、うち連れ*声づくれば（いつもは見掛けない山寺の僧たちまで連れ立って読経を唱えれば）、まづ胸つぶれて（とにかく驚かされて）、もの恐ろしくわびしうおぼゆることさへ添ひにたるが（もの恐ろしく心細く思われる気持ちさえ増すのが）、いみじう堪へがたきこと（とても厭です）」　*「来し方（きしかた）」は＜過去＞ではあるだろうが、此処では＜八宮の存命中＞という意味のようだ。「風の音も荒らかに」以下が現在の状態を言っているようで、その現在とは＜八宮の死後＞の意味であるらしい。　*「頼もしげなる世」は＜安定した生活＞という言い方にも見えるが、姫君たちの王家身分からすれば、それに相応しい＜華やいだ生活＞くらいに聞こえる。　*「風の音も」以下は、「来し方」に対して＜現在＞の話らしい。現代文なら＜今や＞などの副詞語用は必須だ。　*「れいみぬひとかげ」は「うち連れ声づくれば」とあるので追善供養を上げに山荘に参上する＜山寺の僧たち＞らしい。　*「声作る（こわづくる）」は大辞林に＜普段とは違う声を出す。作り声をする。＞または＜せきばらいをする。＞とある。が。此処では「うち連れ」とあり、喪中に声を揃えるのは＜僧たちの読経上げ＞に違いない。

と、*二所うち語らひつつ（と姫君たちは二人で話し合いながら）、干す世もなくて過ぐしたまふに（涙の乾く日も無しに過ごしなさる内に）、年も暮れにけり（年も暮れました）。　*「二所うち語らひつつ」とあるので、上文を姫君たち二人の会話文風に校訂してあるようで、敬意を持って妥当に思うが、本文は、言ってみれば、だらだらと仮名文で書き連ねられているのだろうし、そのまま読み下した読者は、会話の臨場感よりは、およその姫君たちの心情として、これらの会話文を受け止めたような気がする。だからどうだと言う気はないが、場面描写だとすると、衣服は喪服だとしても、山や川の季節感ある背景描写が無いので、絵が想定できず、作者も心情説明の心算で是を書いたのだろうと、作為確認する。